「母たちのようすはわかりませんか。」
五郎は心配げにたずねました。
「のちほど……。」
清助おじは、低い声でそう言っただけで奥の部屋に入りました。奥の部屋に居た難民たちを外に出してから、五郎ひとりを呼んで、母たちの最期のようすを話すのでした。
「今朝のことです。敵兵が城下に侵入してきたので、そなたの母上をはじめお家の人一同に、ここを立ちのいて面川沢へ行くようにとおすすめしたのですが、お聞き入れになりませんでした。祖母、母、兄嫁、姉それに下と妹までが、いさぎよく自害されましたぞ……。」
「……」
「わしは、たのまれて介錯をしたあと、家に火を放って立ちのいてきました。